

小学校教諭及び保育者養成カリキュラムの検討 その3 —— 小学校・幼稚園・保育所を対象とした調査 ——

The Research for Improvement of the Training Curriculum of
Elementary School Teachers, Kindergarten Teachers, and Nursery Teachers (3)

星	信子	高野	裕	晴山	紫恵子
Nobuko	HOSHI	Yutaka	TAKANO	Shieko	HAREYAMA
桑原	雅子	水谷	一郎	関谷	正子
Masako	KUWABARA	Ichiro	MIZUTANI	Masako	SEKIYA
川村	道夫	紺野	忠一郎	出淵	護
Michio	KAWAMURA	Chuichiro	KONNO	Mamoru	DEBUCHI
谷本	百子	林	亨	菊地	達夫
Momoko	TANIMOTO	Toru	HAYASHI	Tatsuo	KIKUCHI
		青池	美紀		
		Miki	AOIKE		

はじめに

本学初等教育学科のカリキュラムの大きな特色として、音楽・図画工作・体育の技能科目を重視したコースを設定していることがあげられる。このコース制は、学科創設時に「北海道における音楽・図画工作・体育の教員不足を補う必要がある」という北海道小学校長会の所見を受け、この要請に応える課程をおいたことを端緒としている。保育者養成のカリキュラムにおいても、音楽・美術・体育の3分野の教科からなる「基礎技能」は、保育を展開するために必要な知識や技能を習得するための科目として位置づけられている（本稿では以下、音楽・美術（図画工作）・体育の3分野からなる科目群を基礎技能とする）。

しかし、近年の子どもを取り巻く社会情勢の大きな変化に伴い、保育・教育現場で求められる人物像が変化しつつあることはよく指摘されており、子育て支援等を積極的に推進していくことができる人材の育成に対する強い要請があることはその一例である。また、指定保育士養成施設における保育士養成課程が平成14年4月1日より改訂されたが、その際に、「家族援助論」の新設や「保育実習Ⅱ・Ⅲ」の選択必修化による実習の充実など、幅広い分野での保育士としての専門性を高めるための内容が加えられる一方、基礎技能の必修科目数は2単位削減された。この改訂の内容を受け、近年では保育者養成における基礎技能の重要性は以前より低くなったと単純に考えて良いのであろうか？ 特に、保育の現場で保育者の資質としての基礎技能の位置づけについてどのように考えているのかを、地域の特性も含めてきちんと把握した上

で、各々の養成機関がその独自のカリキュラム全体における基礎技能科目の位置づけについて検討し、その有効性について問い直していくことが求められていると考えられる。

本研究は、全道の小学校・幼稚園・保育所を対象として実施した質問紙調査、及び、江別市近郊の小学校・幼稚園での面接調査の結果から、教師・保育者養成カリキュラムにおける基礎技能の重要性や、本学科のコース制が実際にどの程度現場で有効であると認知されているか等を検討し、本学科のカリキュラム改善に資すること、ひいてはより良い教師・保育者養成を目指すことを目的とするものである。

方 法

1. 質問紙調査

北海道内の全ての小学校・幼稚園・保育所を対象とする質問紙調査を実施した。回答者の選択については特に条件を示さず、学校・園（所）に任せ、各校・園（所）毎に1名が回答した。

(1) 調査用紙：小学校用、幼稚園・保育所用の2種類を作成した。主な項目は以下の通り。

- ① 保育者の資質としての基礎技能の重要性
- ② 保育者養成カリキュラムにおける基礎技能の位置づけ
- ③ 養成カリキュラムの基礎技能科目の中で取り組むべき内容
- ④ 教育・保育の中で重点的に取り組んでいる活動
- ⑤ 本学のコース制について
- ⑥ 教師・保育者として望む資質

(2) 調査方法：全て郵送により送付・回収を行った。

(3) 調査期間：平成16年11月～12月

(4) 発送数：小学校：1419通、幼稚園：582通、保育所：821通

(5) 回収数：小学校：780通、幼稚園：262通、保育所：341通である。幼稚園・保育所用の質問紙については、園種の未記入のため園種別が不明なものが35通あり、幼稚園・保育所あわせて638通となった。

(6) 回収率：小学校：55.0%、幼稚園・保育所あわせて45.5%。

2. 面接調査

(1) 本学科卒業生が勤務している小学校・幼稚園の校長・教頭・園長先生への面接調査

江別市近郊の小学校4校・幼稚園5園を訪問し、標準化面接を実施した。主な内容は、本学科コース制についての評価、期待する資質などである。

(2) 教育実習（小学校・幼稚園）の巡回指導の際の面接調査

平成16年度教育実習の巡回指導の際、可能な場合にのみ本学科コース制の評価についての聞き取りを実施し、小学校3校、幼稚園19園から回答を得た。回答者は校長・園長・実習指導担当者などであった。

結 果

以下、質問紙調査及び面接調査の両者の結果をあわせて報告する。特に記述のない場合は質問紙調査の結果について報告したものであり、示した数値は全有効回答に対する特定の回答の比率である。また、保育士は保育所に勤務する場合のみを想定しており、児童福祉施設等に勤務する場合を考慮に入れていない。

質問紙調査の回答者の属性を表1に示す。

表1 質問紙調査の回答者の属性

		役職					経験年数				
		校長・園長・ 所長	教頭・副園長・ 副所長・主任	教諭・ 保育士	その他	不明	10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上	不明
小学校	度数	86	582	84	6	22	13	60	408	170	129
	%	11.0	74.6	10.8	0.8	2.8	1.7	7.7	52.3	21.8	16.5
幼稚園	度数	334	251	34	5	14	92	108	225	178	35
保育所	%	52.4	39.3	5.3	0.8	2.2	14.4	16.9	35.3	27.9	5.5

		年齢					性別		
		40歳未満	40歳以上 50歳未満	50歳以上 60歳未満	60歳以上	不明	男	女	不明
小学校	度数	35	358	317	5	65	585	83	112
	%	4.5	45.9	40.6	0.6	8.3	75.0	10.6	14.4
幼稚園	度数	76	186	228	101	47	124	493	21
保育所	%	11.9	29.2	35.7	15.8	7.4	19.4	77.3	3.3

1. 小学校教諭及び保育者の資質としての基礎技能の重要性について

小学校教諭の資質としての基礎技能の重要性をどのように考えるかについての回答を、図1（10年以上前）、図2（現在）に示す。結果によれば、小学校教諭の資質としての基礎技能全般の重要性について、10年以上前でも現在でも高いとする回答が最も多かった（10年以上前：75.4%；現在：81.5%）。

次に、保育者の資質としての基礎技能の重要性をどのように考えるかについての回答を、図3（10年以上前）、図4（現在）に示す。結果によれば、保育者の資質としての基礎技能全般の重要性について、10年以上前でも現在でも高いとする回答が最も多かった（10年以上前：71.7%；現在：71.0%）。また、幼稚園と保育所の回答の間に差はみられなかった（10年以上前： $\chi^2=4.3$, n.s.；現在： $\chi^2=2.8$, n.s.）。

「特定の技能のみに重要性が認められる」を選択した場合、音楽・図画工作（美術）・体育の3分野のうちいずれが重要と考えるかについては、10年以上前、現在のいずれにおいても、また小学校・幼稚園・保育所、全ての校種において音楽を選択する場合が7～8割と最も多くみられた。

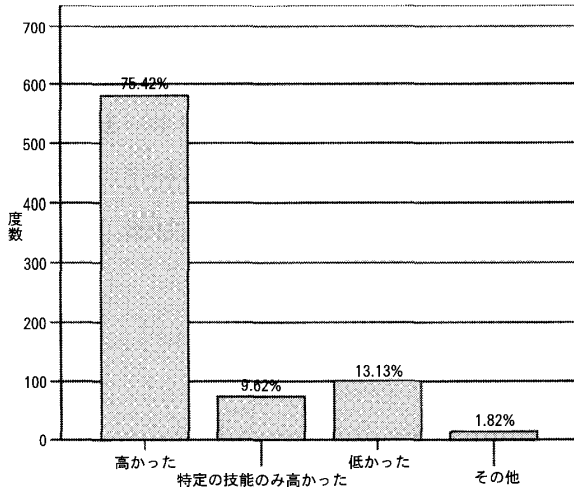


図1 10年以上前の基礎技能の重要性 (小学校)

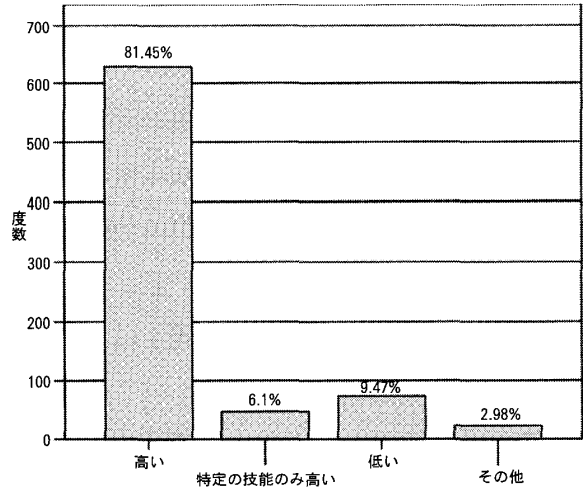


図2 現在の基礎技能の重要性 (小学校)

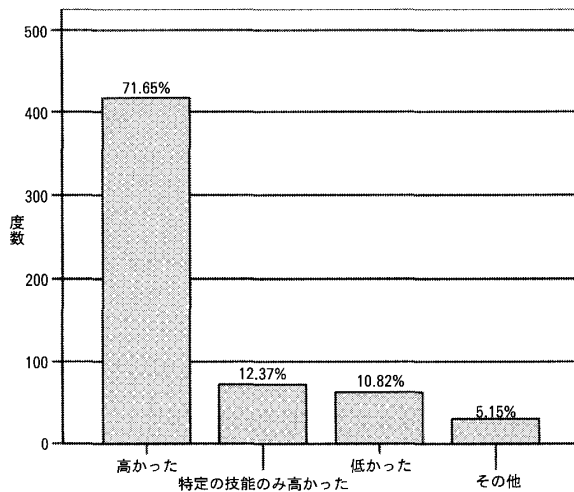


図3 10年以上前の基礎技能の重要性 (幼稚園・保育所)

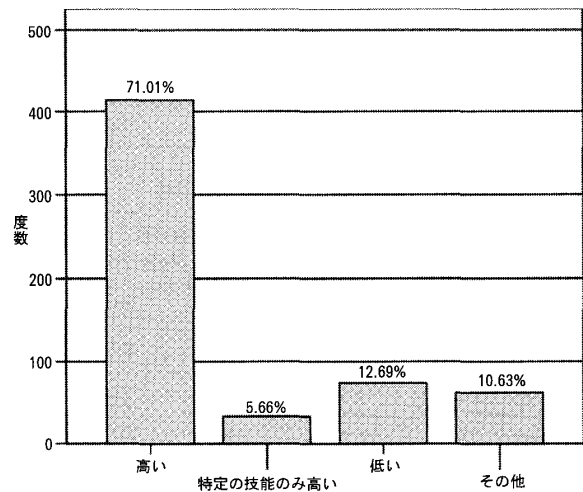


図4 現在の基礎技能の重要性 (幼稚園・保育所)

2. 小学校教諭及び保育者養成カリキュラムにおける基礎技能科目の位置づけについて

小学校教諭養成カリキュラムにおける基礎技能科目の位置づけをどのように考えるかについての回答を図5, 保育者養成カリキュラムにおける基礎技能科目の位置づけをどのように考えるかの回答を図6に示す。いずれも非常に類似した結果となっており、「基礎技能科目全般に重点をおいたカリキュラムが有効である」とする回答が最も多く(小学校:51.8%;幼稚園・保育所:50.2%),次に「基礎技能科目全般に多少重点をおいたカリキュラムが有効である」とする回答が多くみられた(小学校:38.5%;幼稚園・保育所:38.3%)。

幼稚園と保育所の回答の間には差があり(「特定の技能科目だけに重点をおいたカリキュラムが有効である」とした回答が非常に少なかったため,その回答を「その他」に含めてカイ2乗検定を行った; $\chi^2=12.8, p<.01$),幼稚園は保育所に比べて「基礎技能科目全般に重点をおいたカリキュラムが有効である」とする回答が多く,「基礎技能科目に重点をおいたカリキュラムは有効ではない」とする回答が少なかった。

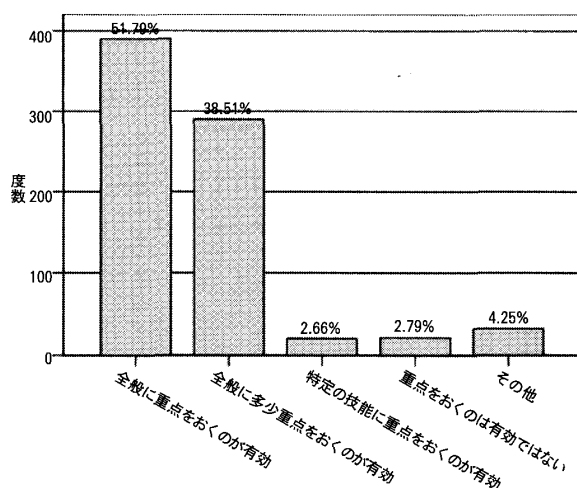


図5 養成カリキュラムにおける基礎技能科目の位置づけ（小学校）

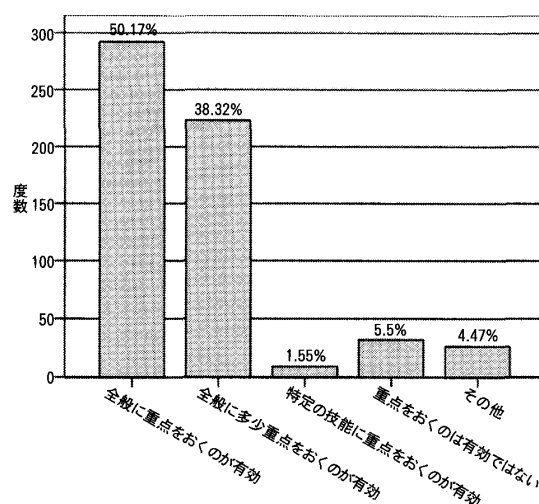


図6 養成カリキュラムにおける基礎技能科目の位置づけ（幼稚園・保育所）

3. 基礎技能科目の3つの分野で重点的に取り組む必要があると考えられる内容について

基礎技能科目の中で特に重点的に取り組む必要があると考える内容について、音楽・図画工作（美術）・体育の3つの分野ごとに、選択肢の中からそれぞれ5つ以内まで選択するという設問についての回答を、各々の選択肢について、全回答に対する選択の比率を高い順に並べた結果を示す。まず、小学校の音楽分野についての結果を図7、図画工作分野についての結果を図8、体育分野についての結果を図9に示す。

次に、幼稚園・保育所の音楽分野についての結果を図10、美術分野についての結果を図11、体育分野についての結果を図12に示す。小学校と幼稚園・保育所では選択肢が異なるため単純な比較はできないが、小学校では各分野の指導法を選択した回答が幼稚園・保育所に比べて多い。

また、幼稚園と保育所の回答は音楽分野と美術分野は比較的類似しているが、体育分野では差がみられた。まず、音楽分野では、幼稚園では多いものから「ピアノ」(74.4%)、「手遊び・歌遊び」(71.8%)、「リズム遊び」(68.3%)、「わらべうた・童謡」(42.7%)、保育所では「手遊び・歌遊び」(75.1%)、「リズム遊び」(70.7%)、「わらべうた・童謡」(69.5%)「ピアノ」(60.7%)となっている。幼稚園で最も多く選択された「ピアノ」が保育所では多少少なく、「わらべうた・童謡」は幼稚園よりも保育所で多くなっているが、上位に選択されている内容は同じである。美術分野では、幼稚園では多いものから「造形遊び」(66.0%)、「絵画表現」(64.5%)、「工作・おもちゃ制作」(59.9%)、「行事・学級通信・環境整備等に使える造形能力」(53.8%)、保育所では「造形遊び」(63.3%)、「工作・おもちゃ制作」(60.1%)、「絵画表現」(57.2%)、「行事・学級通信・環境整備等に使える造形能力」(46.0%)となっており、2番目と3番目が逆になっているが、やはり上位に選択されている内容は同じである。

体育分野では、幼稚園では多い順から「リズム・模倣表現遊び」(75.6%)、「運動遊び指導法」(62.2%)、「体操・動きづくり」(48.1%)、「ボール遊び」(42.7%)、保育所では「リズム・

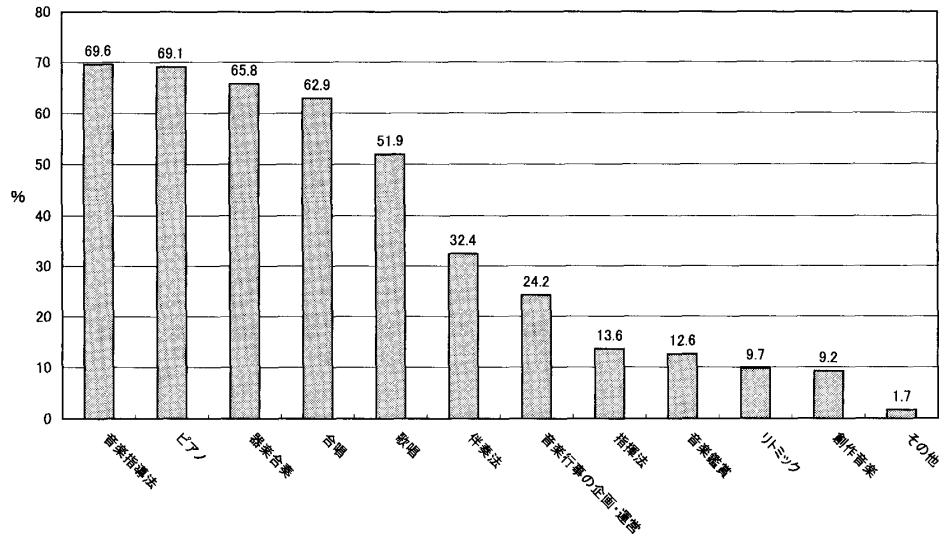


図7 音楽分野で重点的に取り組むべき内容（小学校）

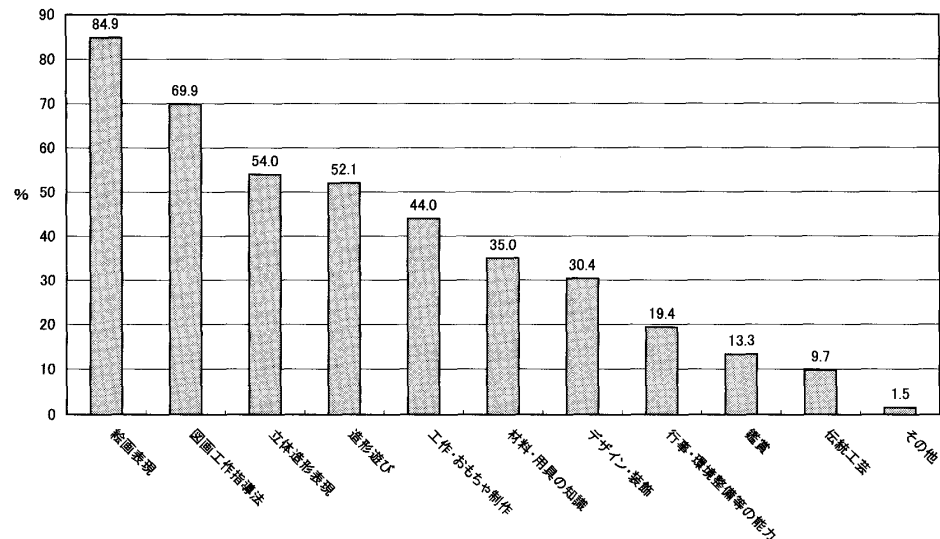


図8 図画工作分野で重点的に取り組むべき内容（小学校）

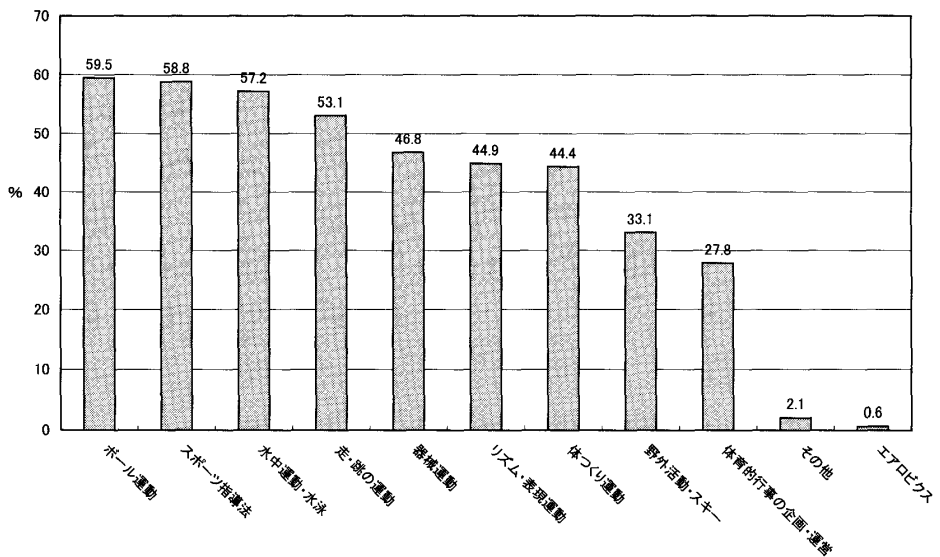


図9 体育分野で重点的に取り組むべき内容（小学校）

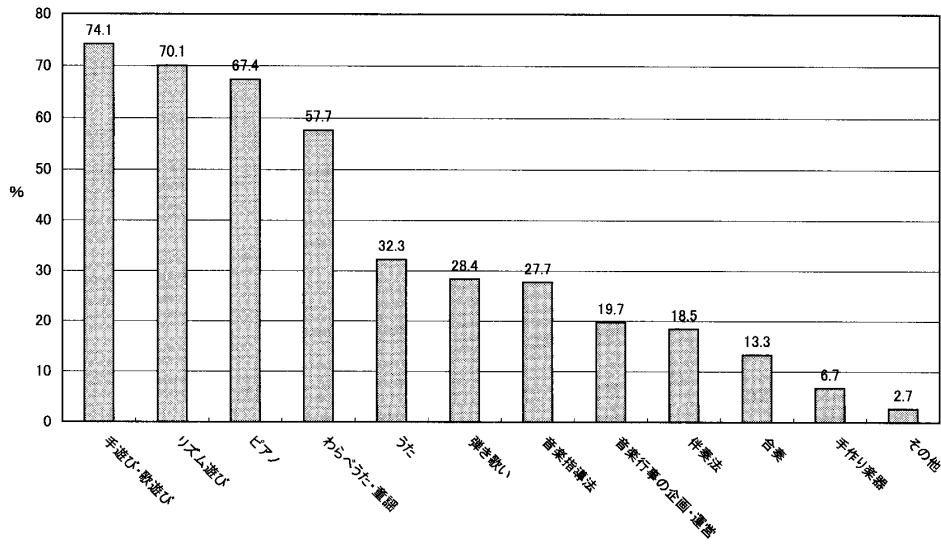


図10 音楽分野で重点的に取り組むべき内容（幼稚園・保育所）

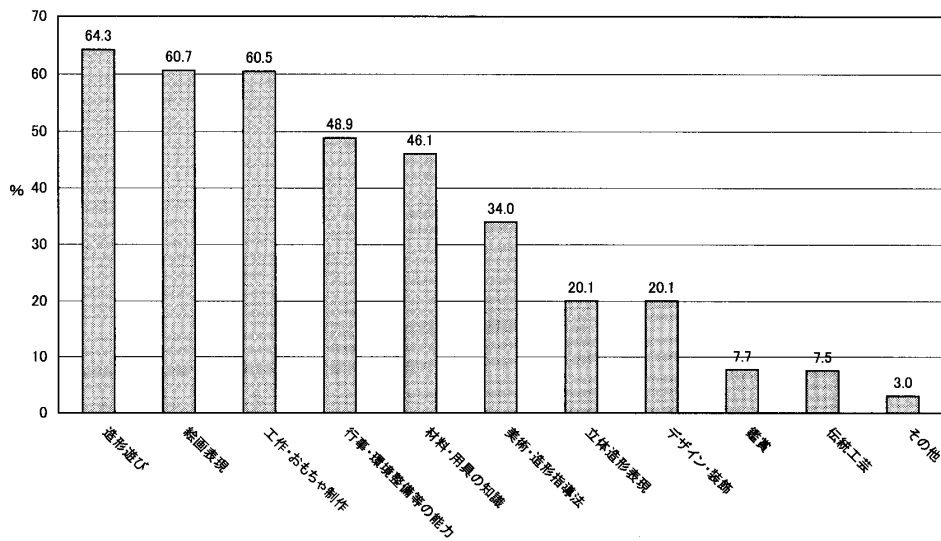


図11 美術分野で重点的に取り組むべき内容（幼稚園・保育所）

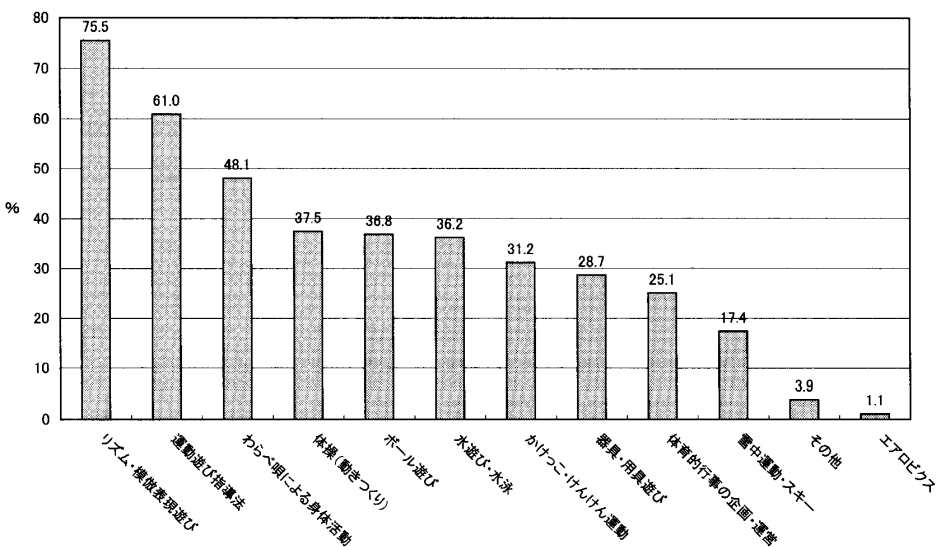


図12 体育分野で重点的に取り組むべき内容（幼稚園・保育所）

「模倣表現遊び」(75.7%)、「わらべ唄による身体活動」(60.7%)「運動遊び指導法」(60.4%)、「水遊び・水泳」(33.1%)となっている。「リズム・模倣表現遊び」が最も多く選択されている点は共通しているが、その他は選択される比率や内容などが異なっていた。保育所で6割以上選択された「わらべ唄による身体活動」は幼稚園では3割程度しか選択されておらず、音楽分野と同様の傾向である。

4. 各学校・園(所)で重点的に取り組んでいる活動について

各学校・園(所)で重点的に取り組んでいる活動について、選択肢の中であてはまるもの全てを選択するという設問に対する回答である。各々の選択肢について、全回答に対する選択の比率を高い順に並べた結果を、小学校は図13、幼稚園・保育所は図14に示す。

この設問も小学校と幼稚園・保育所では選択肢が異なっているが、小学校では「図書館利用・

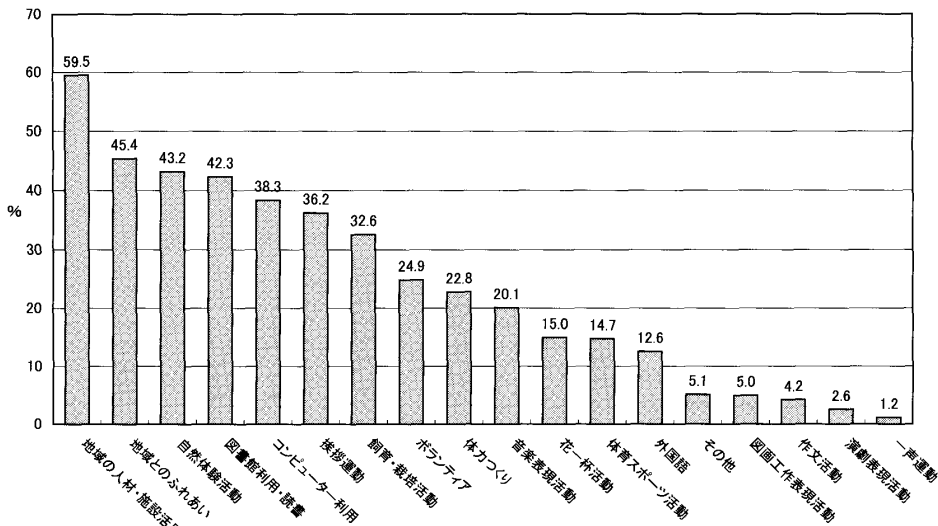


図13 重点的に取り組んでいる活動(小学校)

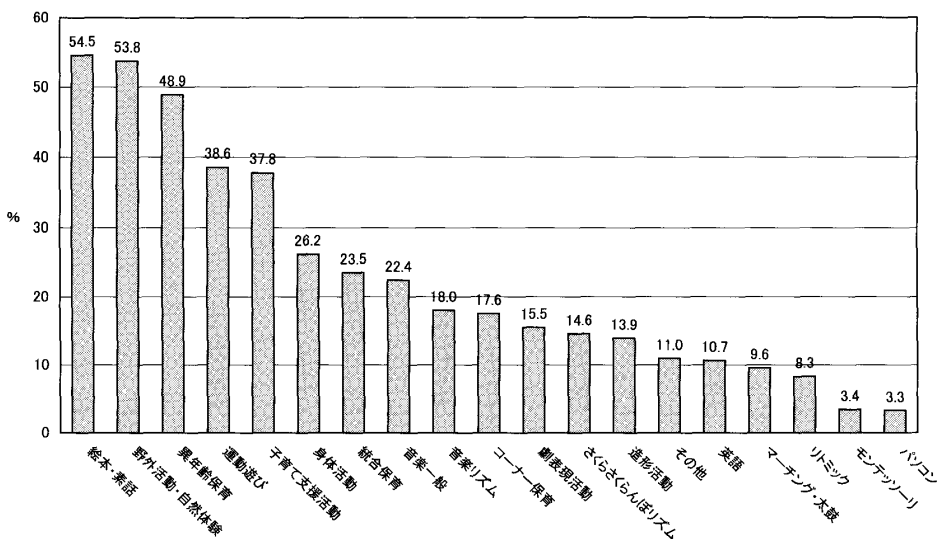


図14 重点的に取り組んでいる活動(幼稚園・保育所)

読書活動」(42.3%)、幼稚園・保育所では「絵本・素話」(54.5%)、また小学校では「自然体験活動」(43.2%)、幼稚園・保育所では「野外活動・自然体験」(53.8%)といった共通する活動が多く選択されている。また、基礎技能と直接的な関連をもつ活動については、幼稚園・保育所で「運動遊び」(38.6%)が比較的多く選択されているのを除き、小学校での「音楽表現活動」が20.1%、「図画工作表現活動」が5.0%、「体力づくり」が22.8%、「体育スポーツ活動」が14.7%、幼稚園・保育所での「音楽一般」が22.4%、「音楽リズム」が18.0%、「造形活動」が13.9%と、選択されることが少なかった。

5. 実習生・新卒採用者が修得できていないことが多い内容について

一般的に、最近の実習生や新卒採用者が十分に修得できていないことが多いと考えられることについては、小学校では「教育の理念」・「子どもをとりまく社会背景」・「指導技術」を4割以上、次いで「教職に関する専門知識」を3割以上の学校が選択しており、幼稚園・保育所では、「一般教養」・「子どもをとりまく社会背景」を4割以上、次いで「保育職に関する専門知識」・「保育技術・基礎技能」・「保育内容に関する専門知識」・「保育理念」を3割程度の園(所)が選択した。面接調査においても同様な結果が得られており、幼稚園では礼儀・挨拶・文章力なども含めて一般教養が身に付いていないという意見が多く聞かれた。

6. コース制について

本学科の音楽・図画工作・体育のコース制については、本学科の卒業生が在職している学校、園(所)のみを対象として、その評価などについて尋ねた。初めに、コース制を知っているかどうかについての回答を、小学校については図15、幼稚園・保育所については図16に示す。コース制を「知っている」と回答した学校、園(所)は、小学校では33.8%、幼稚園・保育所では55.26%であった。面接調査でもやはり同様な結果であり、実習生や卒業生がお世話になっている場合でも、小学校ではほとんど、幼稚園で約半数がコース制について知らないと回答している。

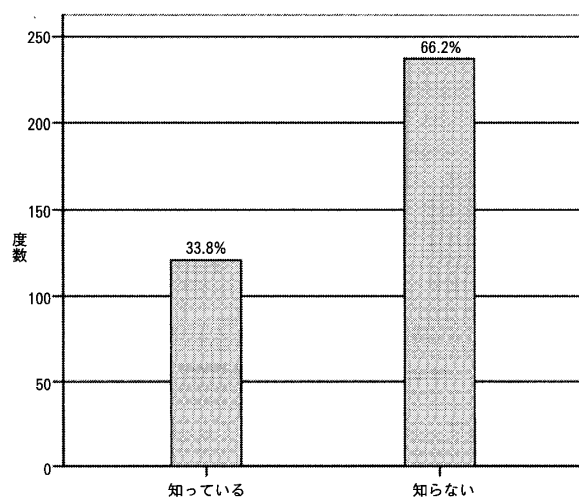


図15 コース制について (小学校)

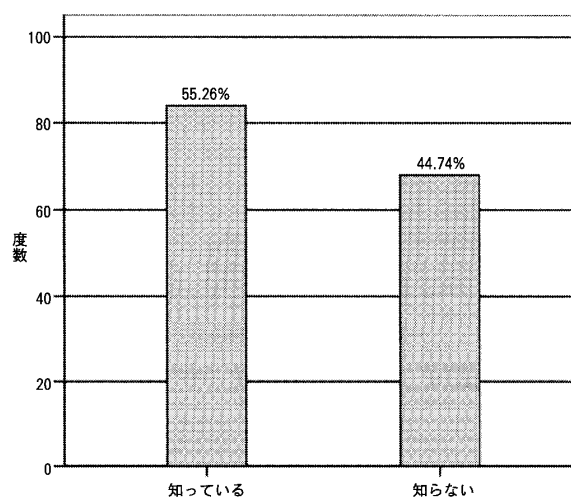


図16 コース制について (幼稚園・保育所)

次に、在職している卒業生がコースで学んだことを職場で生かしていると思うかどうかについて、小学校の回答を図17、幼稚園・保育所の回答を図18に示す。小学校、幼稚園・保育所とも、「とてもそう思う」・「そう思う」をあわせると約半数程度となった。面接調査では、卒業生や実習生がコース制を生かしていると回答した学校・園（所）は、約4分の1程度であった。

また、コース制が小学校教諭及び保育者養成カリキュラムにおいて有効だと思うかどうかについて、小学校の回答を図19、幼稚園・保育所の回答を図20に示す。小学校では、コースの有効性について「とてもそう思う」・「そう思う」を合わせると約7割となるが、幼稚園・保育所では約4割であった。面接調査でもやはり同様の結果であり、コース制についての肯定的な評価を持つという意見は、小学校ではほとんど全ての学校、幼稚園では約半数の園で聞かれた。

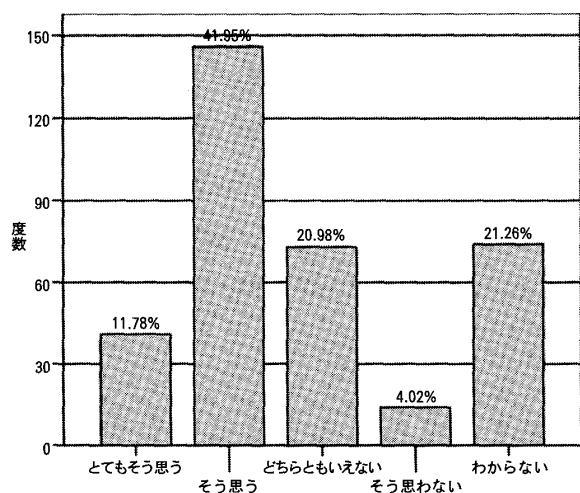


図17 卒業生のコース制の活用（小学校）

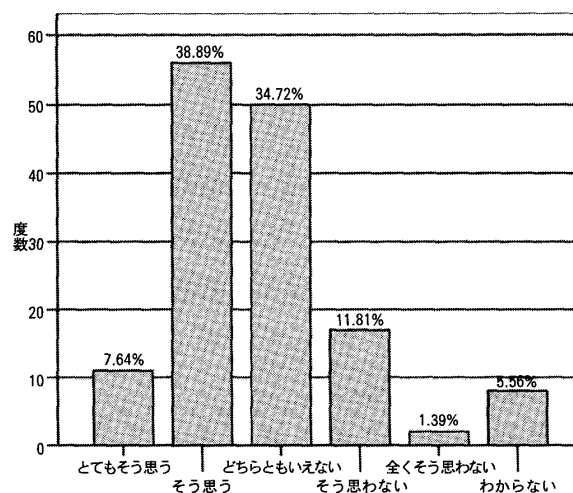


図18 卒業生のコース制の活用（幼稚園・保育所）

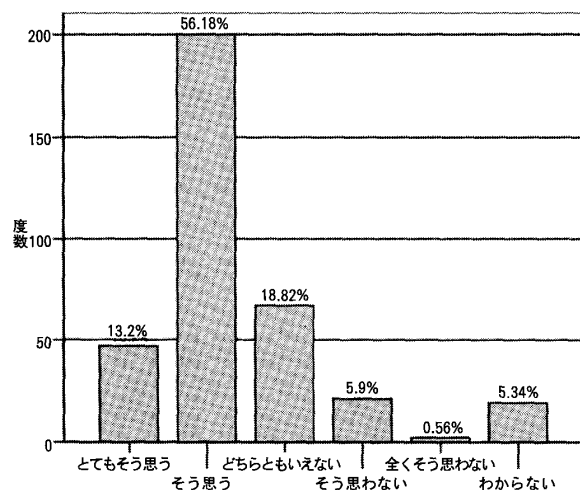


図19 コースの有効性（小学校）

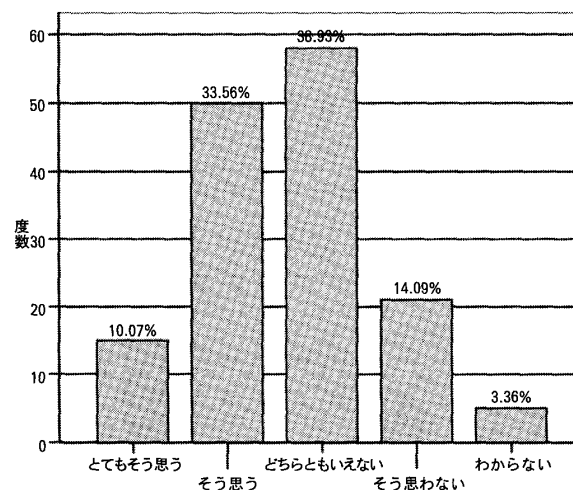


図20 コースの有効性（幼稚園・保育所）

7. 期待する学生の資質について

最後に、小学校、幼稚園・保育所が小学校教諭及び保育者として求める学生の資質について

述べる。小学校では学校毎に採用を行わないため「教師として求める学生の資質」、幼稚園・保育所では「採用に当たって望む学生の資質」についての自由記述を求めたことへの回答を分析したものである。全体を通して多く述べられた意見をいくつかの資質に分類し、記述総数に対するその資質の出現比率を校種別に算出した。記述された主な資質とその分類について表2に、その出現比率を図21に示す。図21は、小学校教諭として求められる資質の出現比率の高いものから順に並べて表示した。

表2 記述された用語と分類

記述された用語	分類後
情熱を持つ、熱意がある、やる気がある、意欲的である、仕事に対する使命感 など	情熱・意欲
子どもが好き、子どもに対する愛情がある、子どもを愛する心をもつ、児童愛 など	子どもが好き
コミュニケーション能力、人間関係をつくる力、対人関係調整能力、協調性 など	コミュニケーション能力
一般常識がある、基本的な生活習慣が身についている、あいさつができる、礼儀が身についている、正しい言葉遣いができる など	常識・礼儀
明るい、明朗、元気、心身共に健康、笑顔がよい など	明るさ・元気さ
子ども理解、幼児理解、子どもの心を理解できる、子どもの発達段階の理解 など	子ども理解
謙虚な人柄、先輩の意見を素直に聞く など	謙虚・素直
責任感がある、仕事への責任を認識 など	責任感
やさしい、温かい、思いやりがある など	やさしさ
創造性がある など	創造性
感性が豊か など	感性

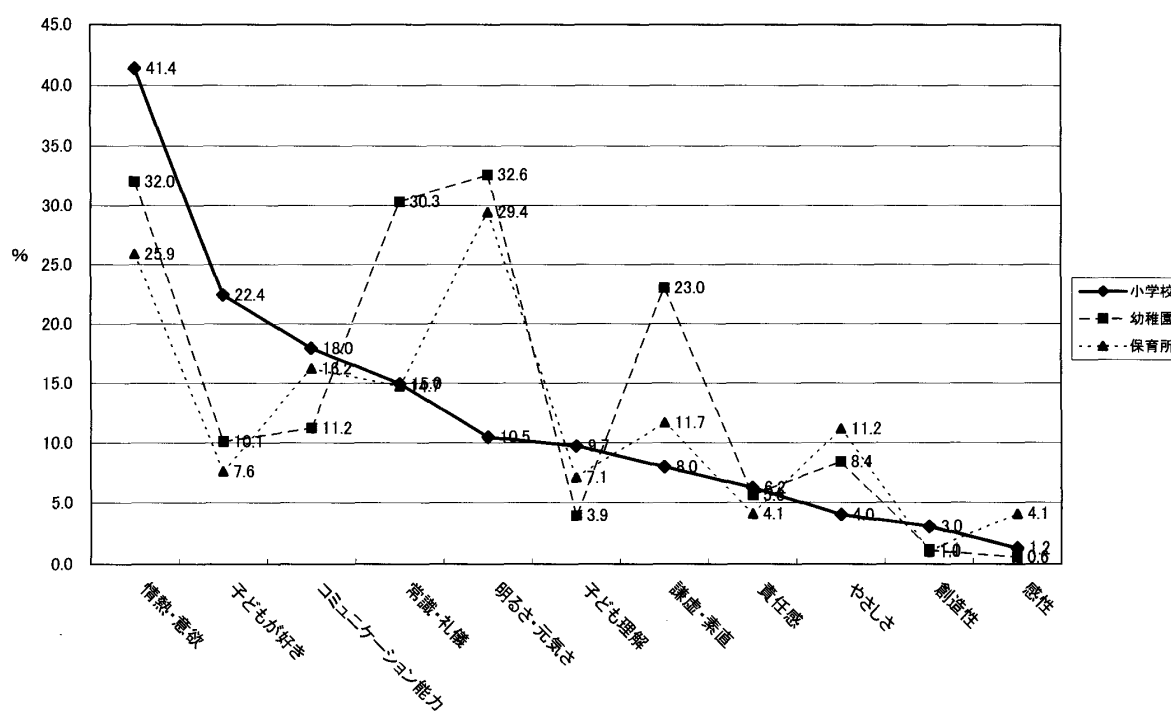


図21 求める資質

図21によると、小学校では「情熱・意欲」が最も多くみられ（41.4%）、次いで「子どもが好き」（22.4%）、「コミュニケーション能力」（18.0%）となっている。幼稚園では、「明るさ・元気さ」が最も多く（32.6%）、次いで「情熱・意欲」（32.0%）、「常識・礼儀」（30.3%）、保育所では、幼稚園と同様最も多いものは「明るさ・元気さ」（29.4%）、次いで「情熱・意欲」（25.9%）、「コミュニケーション能力」（16.2%）となっている。小学校、幼稚園・保育所のいずれにおいても「情熱・意欲」が強く求められていることがわかる。

しかし、幼稚園・保育所で最も多く記述された「明るさ・元気さ」については、小学校では1割程度しか記述されなかった。また逆に、小学校で多くみられた「子どもが好き」は幼稚園・保育所ともに1割程度の記述しかみられなかった。幼稚園・保育所では、むしろ「子どもが好き」だけでは採用できないなどの記述が非常に多くみられ、「子どもが好き」であることが必要ないわけではないが、それだけでは足りないとの考えが強く現れているようである。

また、幼稚園では特に「常識・礼儀」を求める園が多く、加えて「謙虚・素直」が23.0%と比較的多く望まれていることが小学校・保育所と異なっており、注目される。また、小学校と保育所で多く記述された「コミュニケーション能力」については、幼稚園では1割程度しか記述がみられなかった。

同様な傾向は面接調査でもみられ、「明るさ・元気さ」を求める声は幼稚園ではよく聞かれたが、小学校ではまったく聞かれなかった。また、「常識・礼儀」については、幼稚園・小学校いずれも必要とする声が多く聞かれた。

基礎技能については、いずれの校種においても「基礎技能や技術はある程度は必要だが、それよりも別の資質を求める」などの記述が多く、求められている資質として集計するのは適切ではないと考え、分類に入れなかった。

考 察

1. 基礎技能の重要性と養成カリキュラムにおける位置づけについて

質問紙調査の結果から、北海道の小学校、幼稚園・保育所では、小学校教諭、保育者の資質としての基礎技能の重要性が、以前でも現在でも同じように高いと考えているケースが非常に多いことが明らかになった。また同様に、養成カリキュラムにおいても、基礎技能にある程度以上に重点をおいたカリキュラムが有効であると考えている学校・園（所）が多いことも明らかになった。

北海道の教育・保育の現場においても、子どもを取り巻く社会情勢の変化などから様々な変化は確かに起こっていると考えられるが、それによって日常の教育・保育を進める上での基礎技能の必要性が大きく減少したとは受け止められていないことがわかる。教師・保育者として基礎技能は当然身につけるべき資質であり、養成カリキュラムにおいてもそれを軽視したものは求められていないのである。

2. 小学校教諭・保育者として望まれる資質について

しかし、小学校教諭や保育者として必要と考えられている資質を自由に記述したり、述べたりすることを求めると、そこに基礎技能を強く求める意見はほとんどと言っていいほど見受けられない。むしろ基礎技能や技術は必要だが、それよりもっと別の資質が大切などの意見が多くみられたのである。校種を問わず求められているのは、基本的には情熱や意欲であり、当然のことではあるが、教育・保育の仕事は熱意のある人材によって支えられているのである。また、教育や保育の知識や技術は職場に入ってからでも修得していくことができるだけでなく、修得し続けていかななくてはならないものである。このような不断の努力を支えるのはやはり情熱なのであろう。熱意や意欲が足りない者にそれを求めるのは簡単なことではないが、おそらく教師や保育者の仕事の意義や役割などをきちんと理解させることが、その第一歩につながるのではないかと考えられる。

また、幼稚園や保育所では第一に明るさや元気が求められているが、その他に、特に幼稚園では、一般常識やマナーなどが身に付いた学生を求めるといった意見が多くみられた。これは、最近の実習生や新卒の保育者が十分習得していないものの第一に一般常識が挙げられていることと関連していると考えられる。最近の学生の中に、一般常識や日常生活のマナーなどが欠けている者が多くなっていることは、学生の専攻を問わずよく指摘されることであり、また、小学校や保育所で必要な資質として多く記述された、コミュニケーション能力・対人関係能力についても同様な傾向がある。この現状を受けて、具体的なカリキュラム変更を実施した保育者養成校もある。たとえば、愛知県岡崎市にある岡崎女子短期大学では、これまで音楽・美術・体育の3分野を基盤として考えられてきた基礎技能科目の検討を行い、基礎技能の中に、「生活」「文化」「表現」をキーワードとして、日常生活のマナーや基本的な生活技術、子どもとのコミュニケーションを形成するための素養や技能を修得させる科目などを新たに設けている(守山, 長柄, 本山; 2003)。一般常識やマナー, 対人関係能力などの改善を目指すための科目を設置することの有効性については今後検討がなされていくことと考えられるが、いずれにしても、日常的な学生指導も含め、教師・保育者養成カリキュラム全体の中で、これらの資質の向上を計るための具体的で早急な何らかの取り組みが求められていることは明らかである。

3. 音楽・図画工作・体育のコース制について

最後に、本学科のコース制に対する意見について検討する。質問紙調査の中で、本学科のコース制については卒業生が在職している学校・園(所)のみを対象に回答を求めたが、その結果、コース制が有効であるという回答は、小学校ではかなり多かったが、幼稚園・保育所では4割程度しかみられず、どちらともいえないとの回答が同じく4割程度であった。卒業生がコース制を仕事に活かしているかどうかについての回答も同様な傾向がみられた。本学科のコース制設置の経緯については初めにごく簡単に述べたが、小学校教諭の養成を主に念頭においたものであったことから、小学校でコース制の有効性を肯定的に評価する回答が多いことはもっとも

なことであると考えられる。

しかし幼稚園・保育所では、コース制についての否定的な見方こそ少ないものの、肯定的な見方もまた多いとはいえない結果であった。上に述べたように、保育者の資質としての基礎技能の重要性そのものについて否定的な考え方が非常に少ないことをふまえると、基礎技能を中心としたコース制の存在自体について、抜本的な改革の必要性はあまり大きくはないと考えられる。しかし、本学科の卒業生の主な就職先が小学校教諭から保育者へ移行している現状を鑑みると、コース制について何らかの対応が必要であることも明らかである。考えられることのひとつは、コース制の中で取り組む具体的な指導内容を、より現場の要請に応えうるものに改善していくことである。本研究の中でも明らかになった、基礎技能科目の中で取り組むべき内容や、学校・園（所）で重点的に取り組まれている活動などを参考にし、今後のカリキュラム改善に取り組むべきであろう。

また、本研究の調査にあわせて実施した、卒業生に対する質問紙調査の結果も参考になる。たとえば、卒業生が本学科のカリキュラムで最も不十分だったと指摘した内容は、保育技術であり、特に幼稚園教諭となった卒業生が最も高い割合でこれを選択していた（林，他；2005）。初めに述べたように、保育者養成カリキュラムにおける基礎技能とは、日常の保育を支えるために必要な知識や技術を習得するための科目群である。これらを中心としたコース制をしいていながら、半数以上の卒業生が保育技術を十分に習得できなかったと回答していることを真摯に受け止めていかななくてはならない（ただし、この回答を単純に扱うことには問題がある。何故なら、卒業生は同時に最も充実していた内容はコース科目であると回答しているからである。また、卒業生調査の対象となったのは卒業後間もない者であり、まだ保育職の経験が浅い。これらの卒業生が保育技術をどのように位置づけて回答したのかなど、さらに深く検討していく必要がある）。

最後になったが、本研究で実施した調査の中で、教育・保育においては基礎技能などの技術だけでなく人間性を重視すべきである、調査の中にこのような考えがみられないことは残念である、との指摘を何件かいただいた。本学科でも基本的には同様に考えている。本学科では来年度の教育目標を「こどもの保育や教育及びこどもに関する諸課題に適切に対応できる技術や実践力を身につけた人間性豊かな人材の育成」と設定している。豊かな人間性を持ち確かな技術を身につけた、社会から求められる教師・保育者を養成するために、本研究の結果を有効に活用していきたい。

（謝 辞）

本研究では、ご多忙な業務の中、非常に多くの小学校・幼稚園・保育所の先生方に、質問紙や面接調査へご協力をいただきました。特に、質問紙調査の中の、期待する学生の資質について自由に記述していただく項目では、非常に多くの先生方から大変詳しいご回答をいただきました。ご協力に心より感謝申し上げます。

(付 記)

本研究は、平成16年度北海道浅井学園大学短期大学部特別研究費の助成を受けた。

引 用 文 献

林亨，高野裕，晴山紫恵子，桑原雅子，水谷一郎，関谷正子，川村道夫，紺野忠一郎，出淵護，谷本百子，星信子，菊地達夫，青池美紀，2005 小学校教諭及び保育者養成カリキュラムの検討 その2—本学科の音楽・図画工作・体育教育の変遷と卒業生を対象とした調査—，北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要，第43号。

守山均，長柄孝彦，本山益子，2003 保育者養成教育における基礎技能のあり方に関する研究—本学幼児教育学科学生の卒業時調査の結果から（NO.1）—，岡崎女子短期大学研究紀要，第36号，7-15。